



きょうはなにいろ?  
 けるくるーる  
 こぎんとこぎんのある生活をたのしもう

第3号



発行:こぎん刺し 絵糸

2013/10/6

<http://kogin-eito.com/>



十月の一句

近づくほどにダイナミック。はるか眺めると  
 意外と繊細。夜の姿を見たとありますか。

スカイツリー佇む名月肩に乗せ

\*\*\*\*

(実)

すすきに、うさぎ。すっぽん、  
 オオカミ。お団子も似合う——と  
 思えば、無機質な近未来の建物と  
 の組み合わせもまた面白い。ふと  
 見上げた月に宇宙の広さを感じる  
 秋の夜だな。



日々のぜいたく  
 ③ 虫の音

リンリン、チリリ、スイッチョン。  
 今年もそろそろ盛大に聞こえてきました。

気付くと熱帯夜という言葉  
 聞くこともなくなった。ふと気付  
 けば、鈴虫が当たり前のよう  
 にいる。ついこの間までうるさ  
 いほど蟬が鳴いていたのに。  
 虫の声に風流を感じられるの  
 は、日本人の脳だけ、と耳にした  
 ことがある。他の国の人には、単  
 なる雑音の一つにすぎないとい  
 うのだ。涼しさや趣は感じないの  
 だ。まあその説は大げさとして  
 も、日本人の季節を感じる心に欠  
 かせない音であることは間違  
 ない。普段は虫嫌いの人でさえ、  
 風流を感じることだろう。薄い羽  
 根を懸命にふるわせて鳴く姿。時

間を忘れて虫かごの中に見入っ  
 た子ども時代を思い出す人もい  
 るかもしれない。  
 秋の夜に、外の通りから伝わっ  
 てくる気配。犬の散歩をする人の  
 ラジオの音。友達と連れ立ってあ  
 る若者の話声。ウォーキングに  
 一生懸命な夫婦の足音。そんな生  
 活音を背景にして聞こえてくる  
 虫の音に耳をすましながら、積ま  
 れた本に手を伸ばすのもよし、み  
 ずみずしい梨やブドウで親しい  
 人と団欒するもよし。秋はこれか  
 ら。夜長を楽しむ遊びもさまざま  
 だ。④



モドコ・アレコレ  
 ② ふくべ

糸入り、ブレン、ふたりぐみ。

今回は、表情も豊かなこのモドコについて。

ふくべとは、『瓢』と書く通り、  
 ウリ科の、夕顔やひょうたんの実  
 のことをいいます。こぎんのもど  
 こは中心部のくびれた形をして  
 いるから、イメージとしては瓢箪

に近いでしょうか。  
 末広がりの形から縁起よしと  
 され、たくさん連なって成ること  
 から繁栄の象徴としても古くか  
 ら好まれてきました。

夕顔はツル性の植物で、夏の間  
 にゆるく巻いた蔓をぐんぐん伸  
 ばして成長します。大ぶりなハ  
 ト型の葉を青々と茂らせ、夕暮れ  
 の薄闇に浮かびあがるように咲  
 く白くフリルのような花が、儂く  
 も可憐な様子を見せます。

源氏物語では光源氏と夕顔と  
 の出会いの場面で登場します。白  
 く美しく咲く夕顔の花の垣根が  
 印象的に使われて、そこに住む女  
 性の魅力を想像させますね。

実は使い道もいろいろで、時代  
 劇で酒や飲料の器として使われ  
 ているのはおなじみ。中身をくり  
 ぬいて乾燥させることで、器とし  
 て使われました。軽く、すべすべ  
 してデリケートそうな感触のわ  
 りに、なかなか丈夫なのです。  
 また、薄緑の皮をむき、白くみ  
 ずみずしい実を薄く細く切って  
 干せば、日本人にはおなじみの食  
 材、かんぴょうとなります。甘辛  
 く煮て寿司の具にしたかんぴよ

う巻きは、なぜか子どもたちのアイドル。

昆布巻づくりのとき、水で戻したかんぴょうをそっと巻き結ぶ作業も、昆布の着物を具にさせて帯を締めているようで、なんだか楽しいものです。

こぎん刺しのもどこでは、上下のふくらみを示す部分に一本線を入れた「糸入り、ふくべ」もよく使われるなど、それらの組み合わせ次第でいろいろな表情を見せてくれます。糸の色によっては、刺し続けるうちに、なんだか宇宙人のようにも見えてきませんか。



↑ 上・糸入りふくべ  
下・ふくべ

《寄稿》  
駆ける夕



日が落ちて、いくらかひんやりした風が街をすり抜ける頃になると、いつも彼女は出かけていく。何も告げず、音も立てず、うすみ

どり色の布地をまどい、麻のサンダルをひっかけた。彼女が路地から大通へ、地上から地下へと、街じゅうくまなく駆けめぐっても、人々はまったく気付きもしないで、今日の店じまいと明日の支度とに明け暮れる。

— だけど私は気付いている。山も海も見えないこの街に、毎年きちんと夏を届けてくれるのは、彼女なのだ。そして、秋がすぐそこまで来たときにこみ上げる、青くすがすがしい苦みは、彼女が残していったものなのだ。

そう言っている間にも、白くやわらかな彼女の体は、周りの空気にあつという間に溶け込んで、見えなくなってしまうようになる。だから今のうちに、その軽やかな足跡だけでも、私の手でしっかり縫いつけておかないと。ほら、こんな風に、うすみどり色のきれいな糸で。

作 藤田一樹 (ふじたかずき)

詩人・ライター。フリー

ペーパー『シップ』主宰。

津軽富士



この季節は、高い空に、山々が広がる風景が  
いっそう美しく見えますね。

標高3776m。富士山が世界文化遺産として登録された。私は登ったことはないけれど、旅の途中、車や新幹線の窓から見える姿には、いつも心踊る。東京でも条件がそろうと、ふとした瞬間、ピルの隙間から遠くに覗く、美しく端正なシルエット。不思議とすぐに「ああ富士山だ」とわかるものだ。そのくらい、私たち日本人にはなじみ深い。山頂に純白の雪をいただいた姿は、まさに日本の象徴である。

一方で日本全国には、富士山とは別に、郷土富士と呼ばれる山々があるのをご存じだろうか。

こぎん刺しのふるさと、青森にも、津軽富士と呼ばれる山がある。日本百名山にも数えられる岩木山だ。標高1625mながら、緩やかに裾野を広げた円錐形の姿、

美しく白い冠を頂いた姿は、富士の名にふさわしい。

太宰治は、自叙伝的作品『津軽』の中で、「十二単を上げたようので、透き通るくらいに嬋娟たる美女」とたどえている。

津軽平野のどこからでも見ることが出来る岩木山。裾野には豊かな自然が広がる。名物のリングゴやコメの産地である。

また山岳信仰の対象でもあり、数々の伝説がある。森鷗外の『山椒大夫』で知られる、安寿と厨子王の物語。山椒大夫に捕われ母と生き別れになった姉弟の悲しい伝説がもともとなった。弟・厨子王は逃れてのち母との再会をはたす。弟を逃がすため命を落とした姉・安寿は、岩木山にまつられている。地元の人々に愛され、大切に守られているのだ。

津軽に行ったら、ぜひ、雄大でどこかやさしげな岩木山の姿を眺めてみよう。◎

……編集後記……

読書、グルメ、芸術。あつという間の秋をぜいたくに楽しみたいものです。◎